

ごん吉くんしポート／南吉よもやま話

第10回

南吉と戦争①

「張紅倫」と「うた時計」



今年は終戦70周年です。過去の歴史をふりかえり、一人ひとりが戦争と平和について真剣に考えることが求められています。

満州事変が起きた昭和6年に「ごん狐」を書き、太平洋戦争の最中に亡くなった南吉は、戦争についてどう考えていたのでしょうか。今回から連載で紹介します。

日露戦争(明治37～38年)終結から8年後に生まれた南吉にとって、子どもの頃から身近に聞いた戦争体験談といえば、日露戦争のことでした。知多郡の青年たちが入隊する名古屋の第3師団は、ロシア軍の機関銃により大量の死傷者を出した南山の戦いから、日露合わせて60万人もの将兵が動員された奉天会戦まで、幾多の激戦を経験しました。

その奉天会戦を舞台にした童話に「張紅倫」があります。昭和4年、南吉が中学4年生のときに書かれました。この作品で主人公の青木少佐は、歩哨の見回り中に誤って枯井戸に落ち、疲れと空腹で気を失っているところを中国人の親子に助けられます。

軍人は尊敬され、中国人は蔑まれることの多かった当時であって、まだ15歳の南吉は、そうした固定観念から自由でした。それよりも、人と人が立場や文化の違いを越えて分かり合うことを描きたいと思ったのでしょう。

一方、軍隊に対しては、冷やかな目を持っていました。晩年(といっても28歳ですが)に書いた「うた時計」では、監獄を出所した青年と見知らぬ少年のやりとりとして、「おじさん、連隊にいたの。／うん、ずっと前にいたよ。／召集来ないの。／ああ、よそへ行つておつたもんだから。／どこ。／連隊みたいないところだよ。／そういつて男の人はにやりと笑つた。」という会話が登場します。

「うた時計」は、太平洋戦争開戦の翌月、小学館の少年雑誌に発表されましたが、軍隊を揶揄するような作品を載せたことで、編集者は会社の上層部から叱責されたといえます。

南吉は、戦争の非人間性を厭い、ヒューマニズムを大切にしようとした作家と言つていいでしょう。次回は、そうした南吉の気持ちがよく表れた童話「ひろつた らっぱ」を取り上げます。



『赤い鳥』昭和6年11月号に掲載された「張紅倫」

まちがどVoice

Q

最近よく耳にする「マイナンバー」って何ですか？

A

マイナンバーとは「国民一人ひとりが持つ12桁の個人番号」のことです。

マイナンバー制度(社会保障・税番号制度)は、このマイナンバーを使って、税務署などの国の機関や地方公共団体、健康保険組合などが持っている個人の様々な情報を同一の情報かどうか確認する仕組みです。基本的に「社会保障、税、災害対策」の3分野で活用され、スムーズな申告や申請などが可能となり、住民サービスの向上につながると考えられています。

●お住まいの市町村に住民票の異動を!

今年10月から、住民票の住所にマイナンバーの通知をお届けします。通知を確実に受け取っていただくため、今のお住まいと住民票の住所が異なる方は、お住まいの市町村に住民票の異動をお願いします。

